

研究のまとめ

目 次

Ⅷ まとめと今後の課題

1 研究内容1の結果及び成果と課題 121

研究内容1 家庭、関係機関との支援体制を生かした授業づくりを明らかにする。

(1) 結果 121

- ① 各学部の授業づくり
- ② アンケート結果と分析

(2) 成果と課題 123

- ① 成果
- ② 課題

2 研究内容2の結果及び成果と課題 123

研究内容2 授業実践において、子どもが自分のよさやもてる力を発揮するための学習環境と教師の働き掛けを明らかにする。

(1) 結果 123

- ① アンケート結果と分析
- ② 授業分析

(2) 成果と課題 127

- ① 成果
- ② 課題

3 研究内容3の結果及び成果と課題 127

研究内容3 授業実践と生活場面の実践を関連させる取組を探る。

(1) 結果 127

- ① 各学部の実践から
- ② アンケート結果と分析

(2) 成果と課題 129

- ① 成果
- ② 課題

4 まとめ 130

引用・参考文献 131

VIII まとめと今後の課題

わたしたちは、子どもが、学校、家庭、地域生活において、自分のよさやもてる力を発揮することができる授業づくりを探ってきた。そこで、各学部の実践（授業実践、生活場面の実践）とアンケート調査の結果を分析し、研究内容ごとに成果と課題を整理した。アンケートは、本校教師（小学部8人、中学部7人、高等部8人の計23人）を対象に12月に実施した。実施方法は、研究の成果と課題に関する印象を5段階で評価し、自由にコメントを記述するようにした。

1 研究内容1の結果及び成果と課題

研究内容1 家庭、関係機関との支援体制を生かした授業づくりを明らかにする。

(1) 結果

① 各学部の授業づくり

家庭、関係機関と連携した各学部の授業づくりを整理する。

【小学部】 一人一人の教育的ニーズに応えるために自立活動の時間における指導として「にじいろタイム」を設定し、家庭と連携した授業づくりを行った。

- ・ コミュニケーションや社会性・集団参加に関する教育的ニーズに応えるためにアセスメントを実施し、その分析により学習集団を編成した。
- ・ 生活場面の実践をにじいろタイムの個人プログラムに一体化した。
- ・ VTR授業分析や学部ミーティングを実施し、指導及び支援の共有化を図った。
- ・ 自立活動の時間における指導に継続的に取り組んだ。

【中学部】 外部の専門機関による助言を生かした体育の授業づくりを行った。

- ・ MSTBを活用し、一人一人の運動能力の傾向を把握した（運動プロフィール）。
- ・ 評価の観点（「関心・意欲・態度」、「技能・表現」、「知識・理解」、「思考・判断」）を整理した（指導シート）。
- ・ P-D-C-Aサイクルの各段階で運動プロフィール、指導シートを活用した。
- ・ 運動プロフィールや指導シート、VTRを活用して授業ミーティングを行い、教師間で指導及び支援の共有化を図った。
- ・ 運動技能の習得と集団活動の段階性を考慮し、題材配列と活動内容を見直した。

【高等部】 家庭、関係機関との連携において、自分のよさやもてる力を発揮するために必要な支援ツールの在り方を明らかにした。

- ・ これまで活用してきた支援ツールを「支援環境を整える協働ツール」、「自発を促す手掛かりツール」、「実行を助ける手掛かりツール」、「評価の機会を提供する交換記録ツール」の四つの視点で分類・整理した。
- ・ 主体的で、自立的な生活を支えるために、「開発」、「活用」、「検証」、「改良」の四つの段階で支援ツール作成のサイクルを構築した。
- ・ 支援ツール作成の各段階において、「人・場・道具」という視点で必要な情報や支援の在り方を整理した。
- ・ 産業現場等における実習先にサポートブックの活用を依頼し、アンケート調査によりその有効性を検証した。

② アンケート結果と分析

家庭、関係機関との連携、P-D-C-Aサイクルの機能に関する質問項目を次に示す。

ア 研究対象とした指導の形態は、家庭、関係機関との連携の在り方が明らかになっていると思いますか。

イ 研究対象とした指導の形態は、P-D-C-Aサイクルが機能していると思いますか。

ア 家庭、関係機関との連携について

結果を図1に示す。

図1から、「明らかになっていると思う」14名、「どちらでもない」7名、「思わない」3名で、半数以上の肯定的評価を得た。連携の取組は前次からの継続研究であり、そのシステムは定着しつつある。今後の課題としては、連携する内容や方法を一人一人の子どもに応じるなど、個別化や柔軟な運用が考えられる。

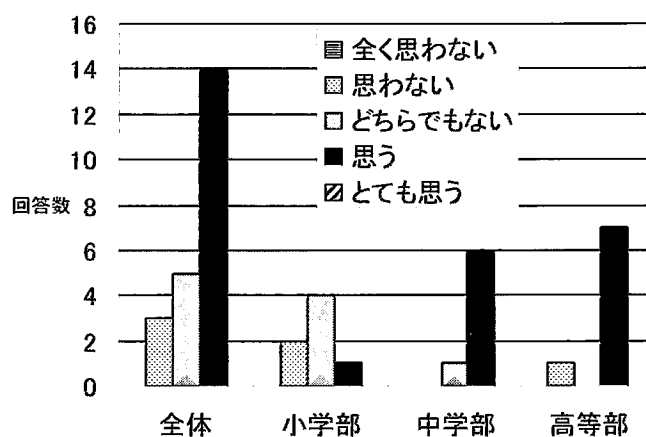


図1 家庭、関係機関との連携の在り方

イ P-D-C-Aの機能について

結果を図2に示す。

図2によると23人中20人が肯定的評価をしている。このことから、授業づくりのP-D-C-Aサイクルは有効に機能していると思われる。

「どちらでもない」の回答の理由として、個別の教育支援計画を個別の指導計画に具現化する手続き、また、改善—設計過程の課題が挙げられている。今後改善を重ね、P-D-C-Aサイクルの充実を図る必要がある。

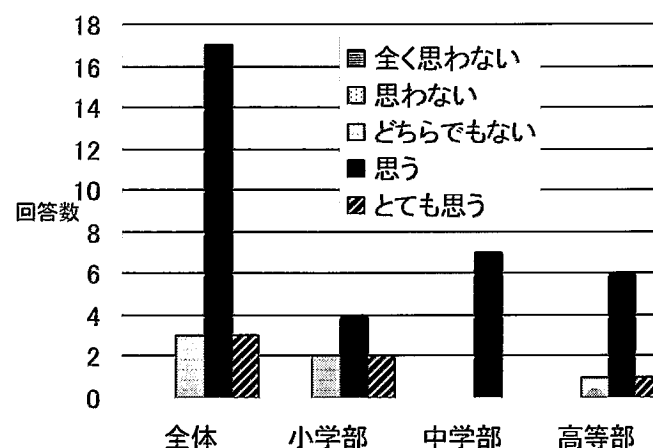


図2 P-D-C-Aサイクルの機能

(2) 成果と課題

① 成果

- ・ 家庭、関係機関の多様な連携をP-D-C-Aサイクルで整理し、基本的な手続きとして整理した（p11, 図8）。
- ・ 授業づくりのサイクル [計画 (Plan) - 実践 (Do) - 評価 (Check) - 改善 (Action)] と授業実践サイクル [授業計画 (plan) - 授業 (do) - 授業評価 (check) - 授業改善 (action)] の二重のサイクルによる授業づくりの構造化を図った。
- ・ P-D-C-Aサイクルで、学校、家庭、関係機関のそれぞれが担う過程を明らかにした。
- ・ 各学部は、指導の形態の特質、単元・題材の意義・価値、学習集団の特徴、子どもの生活年齢、学級運営、子どもと家族とのかかわりなど様々な条件を考慮しながら、基本的な手続きを弾力的に運用して授業づくりに取り組んだ。

② 課題

- ・ 個別の教育支援計画を個別の指導計画に具現化する手続きを、簡便さの視点から見直す必要がある。
- ・ よさやもてる力を発揮するために有効な学習環境や教師の働き掛けに関する情報を、個別の教育支援計画や個別の指導計画に反映させ、次年度に引き継ぐ必要がある。
- ・ 家庭、関係機関と連携した授業づくりの手続きを踏まえながら、子どもに応じて柔軟な運用を図っていきたい。

2 研究内容2の結果及び成果と課題

研究内容2 授業実践において、子どもが自分のよさやもてる力を発揮するための学習環境と教師の働き掛けを明らかにする。

学校、家庭、地域生活で子どもが自分のよさやもてる力を発揮するためには、まず授業において、自分のよさやもてる力を発揮する姿を実現することが重要である。そこで、授業実践では学習環境と教師の働き掛けに焦点を絞り手立ての改善を試みた。具体的には、次のとおりである。

- ・ 関心・意欲・態度、知識・理解、技能・表現を総合的に考察して、目指す学習環境を「やりたい」、「わかる」、「できる」、「できたと思う」の四つの視点で整理した。
- ・ 「物理的環境」、「情報提供」、「教材・教具」の調整項目からなる学習環境リスト [鹿大附養版2006] を作成し、授業実践に活用した。
- ・ 教師の働き掛けに「自発を促す働き掛け」、「実行を支える働き掛け」、「達成感を高める働き掛け」の三つの視点を設けた。
- ・ 一人一人の子どもがよさやもてる力に応じて、働き掛けの種類、量、間合いを検討した。以下に実践の授業分析とアンケート結果を述べ、成果と課題を探る。

(1) 結果

① アンケート結果と分析

授業実践に関して、必要性、自己評価、子どもの変容に関して質問した。項目を以下に示す。

〔学習環境の工夫・調整に関して〕

- ア 子どもがよさやもてる力を発揮するために学習環境の工夫・調整が必要だと思いますか（必要性）。
- イ 子どもがよさやもてる力を発揮するために、あなた自身は、学習環境の工夫・調整をした授業実践を行っていると思いますか（自己評価）。
- ウ 学習環境を工夫・調整することで、子どもがよさやもてる力を発揮していると思う、また、子ども自身の変容は見られた授業がありましたか（子どもの変容）。

〔教師の働き掛けの工夫に関して〕

- ア 子どもがよさやもてる力を発揮するために教師の働き掛けの工夫が必要だと思いますか（必要性）。
- イ 子どもがよさやもてる力を発揮するために、あなた自身は、働き掛けに工夫した授業実践を行っていると思いますか（自己評価）。
- ウ 働き掛けの工夫をすることで、子どもがよさやもてる力を発揮していると思う、また、子ども自身がの変容が見られた授業がありましたか（子どもの変容）。

ア 学習環境と働き掛けの工夫の必要性

結果を図3、4に示す。

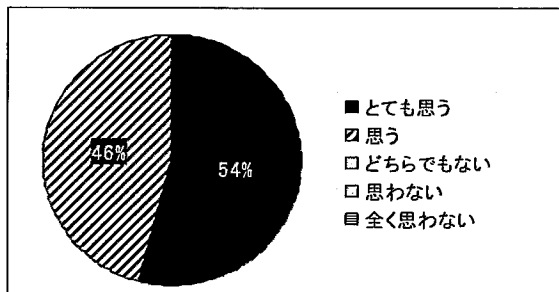


図3 授業実践の工夫の必要性〔学習環境〕

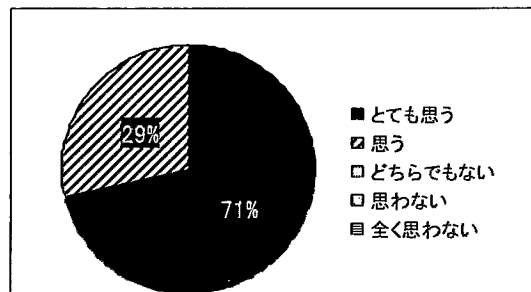


図4 授業実践の工夫の必要性〔働き掛け〕

図3、4から、「学習環境の工夫・調整」、「働き掛けの工夫」の必要性に関しては、どちらも「思う」、「とも思う」の肯定的な評価が100%を占めた。このことから、それらを工夫した本研究の必要性が確認できる。

イ 授業実践の自己評価

結果を図5、6に示す。

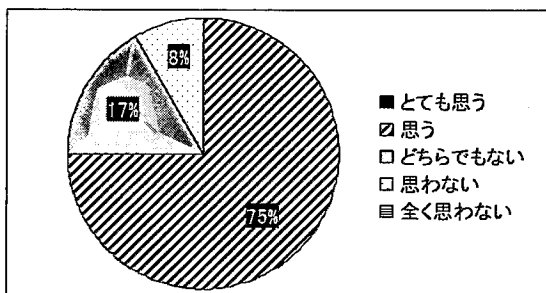


図5 授業実践の自己評価〔学習環境〕

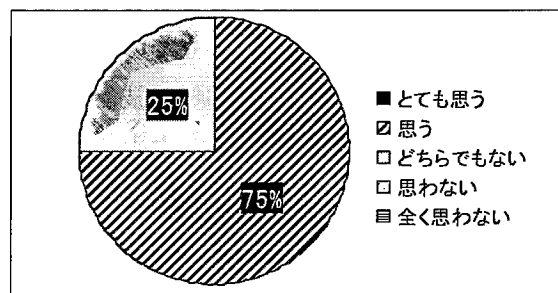


図6 授業実践の自己評価〔働き掛け〕

図5、6から、「学習環境」、「働き掛け」の両方で75%が「工夫していると思う」と回答しており、実践に関する自己評価の高さがうかがえる。一方、「どちらでもない」、「思わない」という回答がいずれも25%ある。自由記述を分析すると、「もっと工夫したいが時間がない」、「思うほどにはできていない」、「教室全体を視覚的な刺激物がないようにする工夫がもっと必要だと考える」、「計画的なフェイディングの方法をもっと勉強したい」など、授業改善に向けた積極的なコメントが多数書かれている。回答者は、より質の高い授業実践を求めていると思われる。

ウ 子どもの変容に関して

結果を図7, 8に示す。

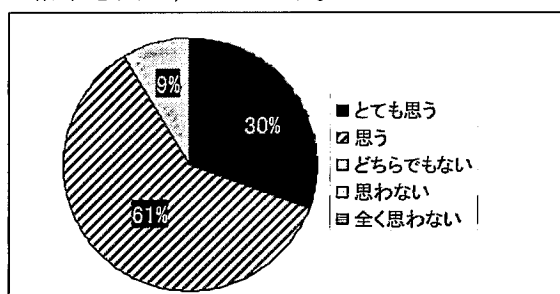


図7 子どもの変容 [学習環境]

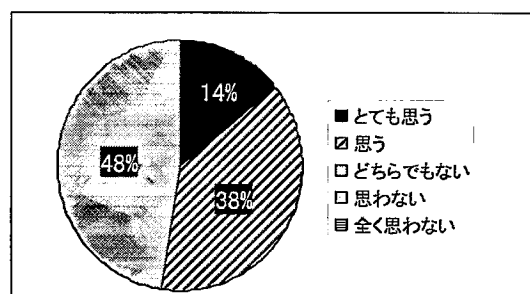


図8 子どもの変容 [働き掛け]

図7から、「とても思う」、「思う」の肯定的な回答が91%を占め、回答者の多くが学習環境の工夫・調整による子どもの変容を感じている。

一方、図8の働き掛けによる子どもの変容に関しては、肯定的評価が52%（「とても思う」14%、「思う」38%）である。否定的評価はなかったが中間的评价が48%を占める。自由記述には、「昨年の授業と比較し、明らかに子どもが主体的に活動している。働き掛けが適切なことが感じられたが十分な検証をしていない」、「働き掛けで子どもが変わったが、どのような働き掛けかはっきりしない」などが挙げられている。このことから、中間的评价が多かった原因は、教師の働き掛けの有効性が検証されにくいことにあると考える。

② 授業分析

【分析の方法】

分析対象： 校内研究会（第3回 H18.10）の指導案の本時に記載されている「学習環境」と「教師の働き掛け」に関する手立て

手順： 本時の手立て（「学習環境の工夫・調整」「教師の働き掛けの工夫」）を抽出し、指導及び支援の意図に沿って分類する。実際には記述されていない多くの手立てがあるが今回は分析対象に含めない。

分類項目： 学習環境リスト [鹿大附養2006年版]、働き掛けの種類

ア 学習環境の工夫・調整の分析

中学部の授業（「グランドテニスをしよう」）の学習環境を学習環境リスト [鹿大附養2006年版]（P15）を用いて分析する。ただし、情報の質に関する項目b-4～7は含めず、a-1～6、b-1～3を用いる。結果を図9に示す。

内容を分析すると、「a-1 活動場所」、「a-2 物の配置」、「b-1 活動方法の明確化」、「b-3 活動量の明確化」の項目は、学習集団全体を対象とした工夫・調整が主である。一方、「a-3 活動の姿勢への配慮」、「a-5/6 注意集中、感覚過敏への配慮」、「a-4 対人関係の配慮」の項目は、一人一人の生徒への配慮が多く、これらは、運動プロフィールや指導シートなどのアセスメントに基づいたものとなっている。

以上のことから、教師は、生徒がよさやもてる力を発揮するために、学習集団全体及び一人一人の生徒を対象に多様な学習環境の工夫・調整を行っていることが明らかになった。

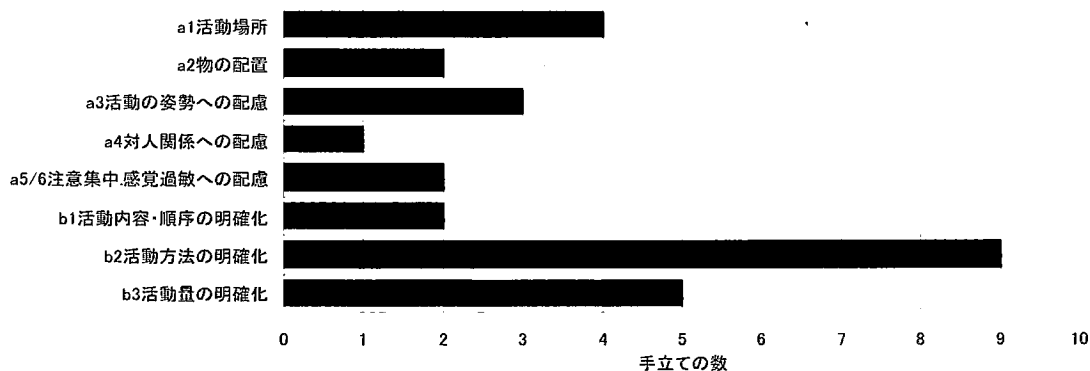


図9 学習環境の工夫・調整の分析 [中学部保健体育]

イ 教師の働き掛けの分析

小学部の授業（「みんなで遊ぶためには」）を、働き掛けの種類で分析する。結果を図10に示す。

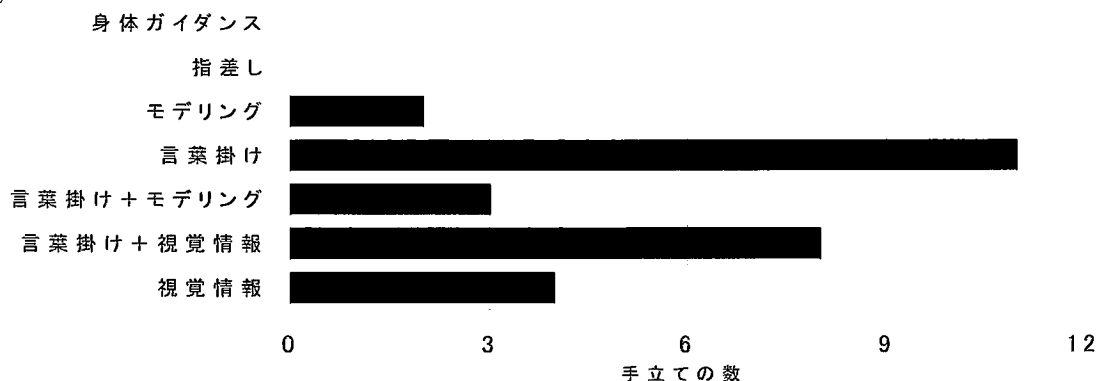


図10 働き掛けの種類分析 [小学部自立活動]

本授業の子どもたちは、音声言語でのコミュニケーションが成立するため、教師の働き掛けは主に「言葉掛け」が多く、図10は、そのことを示している。次いで、「言葉掛け+視覚情報」が多く、「言葉掛け+モデリング」、「視覚情報」も一定量ある。これは、子どもの得意な情報処理を生かしたり、音声言語の理解を補ったりする働き掛けを工夫した結果であると思われる。

ウ 学習環境と教師の働き掛けの量的比較

高等部の授業（「附養まつりの製品を作ろう」）を、学習環境と教師の働き掛けで分析する。結果を図11に示す。

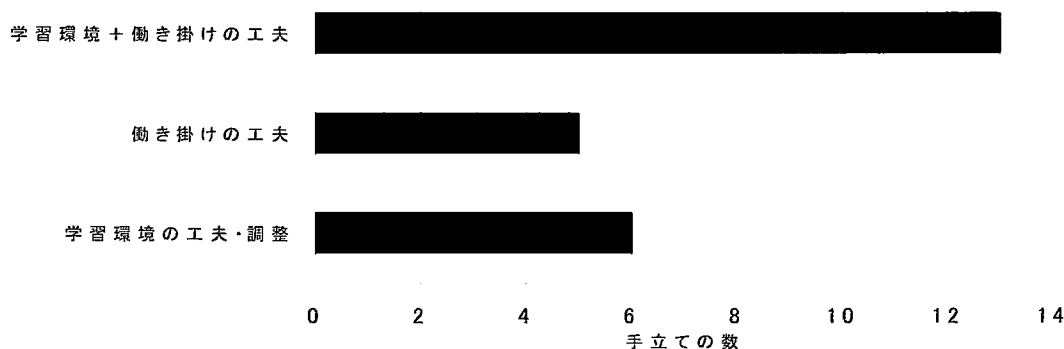


図11 学習環境と教師の働き掛けの分析 [高等部作業学習：木工班]

図11によると、「学習環境＋働き掛け」の総合的な手立てが最も多い。具体的には、「最初は指示書を指さしながら教師と一緒に確認し、徐々に一人で確認できるよう指さしを少なくする」、また、「金づちの上下が分かるようにシールで印を付け、『赤が下』とリズムカルに音声言語で伝える」などである。指示書をどのように提示するか、支援ツールを用いて自発性をどのように高めていくかなど支援ツールを有効に活用するための働き掛けが指導案に明記されている。

高等部は、生徒の主体的で、自立的な活動を促すための支援ツールを充実させること、また支援ツールを活用する教師の働き掛けを工夫することを目指して実践を重ねてきた。図11の結果には、その成果が反映されていると思われる。

(2) 成果と課題

① 成果

- ・ 授業分析とアンケートの結果から、学習環境の工夫・調整、働き掛けの工夫が授業改善に役立ち、子どもの変容につながったことが明らかになった。
- ・ 学習環境を工夫・調整することで子どもの主体的活動が高まるなどの効果が明らかになった。また、集団活動の場においても同様の効果が見られた。
- ・ 学習環境の工夫・調整により、子どもがよさやもてる力を発揮することができる条件は整うが、実際に発揮できるかどうかは、教師の働き掛けそのものによるところが大きかった。したがって、学習環境の工夫・調整と教師の働き掛けの手立てを総合的に行うことが重要である。

② 課題

- ・ 教師の働き掛けの工夫が子どものよさやもてる力の発揮を促すが、今次研究では、その働き掛けの有効性を検証することは困難であった。そのことを実証するためには子どもの変容を継続的に追跡したり、ミクロな視点で分析したりすることが必要になる。
- ・ 機能的な違いにより、「自発を促す働き掛け」、「実行を支える働き掛け」、「達成感を高める働き掛け」の三つの教師の働き掛けを想定した。今後は、指示の量は子どもの理解に応じているか、必要に応じて称賛の言葉掛けがなされているかなど、働き掛けのタイミング、量、質を吟味していきたい。
- ・ 学習環境リストは、授業計画の際の参考にはなるが、項目の重複や漏れがある。活用するためには改良が必要である。

3 研究内容3の結果及び成果と課題

研究内容3 授業実践と生活場面の実践を関連させる取組を探る。

(1) 結果

① 各学部の実践から

【小学部】 にじいろタイムで培った力を、学校、家庭、地域生活において、発揮するための取組をした。

- ・ 情報交換会や授業参加により保護者と支援を共通理解した。
- ・ 生活場面の実践をにじいろタイムの個人プログラムに一体化させた。
- ・ ゲーム、ルール表、頑張り表など学校、家庭、関係機関で共通の教材・教具を用いた。
- ・ 音声出力装置、コミュニケーションブックなどのコミュニケーションの手掛かりになる道具を生活場面の実践に応用した。
- ・ 「外れても大丈夫」など気持ちの安定を促す言葉、「ねえねえ」などかかわりの手掛かりになる言葉は、他の生活場面でも気持ちの安定やかかわりのきっかけにした。

【中学部】 生徒がよさやもてる力を発揮できる有効な学習環境や働き掛けを、他の題材や地域生活（附養スポーツクラブ）に応用する取組を始めた。

- ・ 学部教師間による授業ミーティングでは、授業VTRと運動プロフィールを活用し、有効な学習環境と働き掛けを共有し、他の題材にも応用した。
- ・ FSCにおいて、ボランティア、保護者、教師間で有効な働き掛けを共有した。
- ・ 生徒一人一人に有効な働き掛けに関する情報を蓄積、集約して情報提供した。

【高等部】 産業現場等における実習先や進路先において、支援ツールを共有した取組をした。

- ・ 家庭、産業現場等における実習先や将来の生活を視野に入れて支援ツールの開発をした。
- ・ 自立した生活を目指して支援ツールを家庭と共有した。
- ・ 実習計画ミーティング、評価ミーティングを通して、産業現場等における実習先と支援ツールを共有した。
- ・ 卒業後に生徒にかかわる人が集まり「支援会議」を実施し、支援方法について共有した。

② アンケート結果と分析

授業実践と生活場面の実践を関連させる取組について、次の質問をした。

ア 授業実践と生活場面の実践を関連させる取組は必要だと思いますか。

イ 授業実践と生活場面の実践を関連させる取組は成果があったと思いますか。

ア 関連させる取組の必要性

結果を図12に示す。

図12より、授業実践と生活場面の実践を関連させる取組は、23人中19人が必要性があると回答している。この結果は、本研究の取組を支持するものである。現段階は、実践サイクルの過程にあるため、今後も実践を継続していきたい。

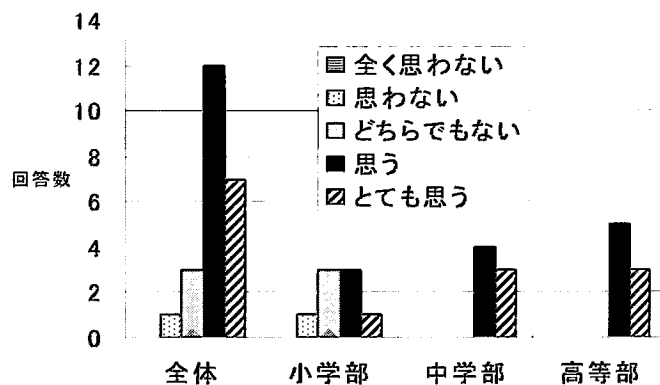


図12 授業実践と生活場面の実践を関連させる取組の必要性

イ 授業実践と生活場面の実践を関連させる取組の成果

結果を図13に示す。

図13より、23人中13人が成果があったと答えている。小学部、中学部で8人が「どちらでもない」、1人が「思わない」と回答している。先にも触れたが、取組の過程にあり、十分な成果が確認されていないことが理由に考えられる。また、研究方法の不明確さも影響していると考えられる。

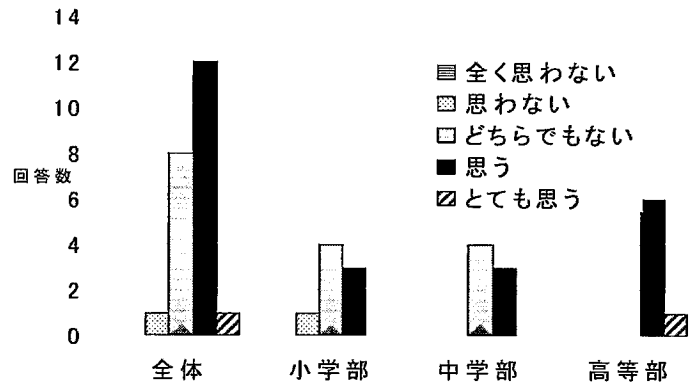


図13 授業実践と生活場面の実践を関連させる取組の成果

(2) 成果と課題

① 成果

授業実践と生活場面の実践を関連させるために有効であった取組を、以下に整理する。

[生活場面における学習機会の設定]

- ・ 授業実践で確実な定着が図られた力は、様々な生活場面で発揮できるよう意図的に学習の機会を設定する。

[つなぐ内容]

- ・ 授業実践と生活場面の実践が一体化したプログラムを作成する。
- ・ 自然な文脈の中に、子ども自身が達成感を感じることができる場面を設定する。
- ・ 生活場面の実践では、自立を見据えて計画的に働き掛けのフェイディングを行う。

[つなぐ道具]

- ・ 生活場面での活用を視野に入れ教材・教具、支援ツールを開発、作成する。
- ・ 授業実践を生活場面につなぐ際は、手掛かりになるもの（環境条件や働き掛け）を可能な限り共通化する。具体的には、次のとおりである。
 - ・ ゲームの道具、ルール表など共通の教材・教具をつなぐ。
 - ・ コミュニケーションに関する取組では、音声出力装置、コミュニケーションブック、かかわりのきっかけになる言葉など開始の手掛かりになる道具と働き掛けを一体化してつなぐ。
 - ・ 教師、保護者、支援関係者からの称賛の機会が増えるように頑張り表などを日常的に交換する。

[つなぐ場]

- ・ 授業参観では、保護者が働き掛けを具体的に体験する場を設ける。
- ・ 連絡帳、送迎時の会話など日常的な情報交換と支援会議やつなぎミーティングなど設定された情報交換の場を有効に活用する。

② 課題

- ・ 「よさやもてる力を発揮する働き掛け」は、かかわる人との関係性が深く関与しているため、お互いに負担感が生じないように配慮する。

- ・ 取組の過程が共有できるように、使いやすい記録を工夫する。
- ・ 働き掛けの段階を明記し、指導の過程が分かるようにする。
- ・ 具体的な教材・教具や支援ツールと働き掛けを関連付けてつなぐ。

4 まとめ

わたしたちは、学校、家庭、地域生活において、子どもが自分のよさやもてる力を発揮することができる授業づくりを探ってきた。具体的には、①前次研究で構築した支援体制を生かし家庭、関係機関と連携した授業づくりをすること、②子どもが自分のよさやもてる力を発揮する学習環境と教師の働き掛けを授業実践で明らかにすること、③授業実践と生活場面の実践を関連させる取組をすることであった。

家庭、関係機関と連携した授業づくりでは、P-D-C-Aサイクルを再構造化し、手続きを整理した。今次研究は、支援体制づくりを目指した前次からの継続研究であったために、家庭、関係機関との連携はより日常化し、システムの定着が図られた。ただし、個別の教育支援計画を踏まえた個別の指導計画作成の過程に課題が見られるため、今後改善が必要である。また、有効な学習環境や働き掛けに関する情報を、個別の教育支援計画や個別の指導計画に反映させ、次年度に引き継ぐシステムを再構築する必要がある。

子どもがよさやもてる力を発揮する授業実践では、学習環境や教師の働き掛けを工夫することで子どもの変容が見られるなど効果が確認された。授業実践の質的改善を図るためには、教師の資質向上が必要不可欠であり、その一つの方法として授業研究の活性化が考えられる。今次研究では、学校全体で2年間に9回の授業研究会を実施し、学習環境と教師の働き掛けが適切であるかどうかの検証を重ねてきた。また、各学部は、VTRを活用した授業ミーティング等を日常的に行った。今次研究では、子どもの変容は見られるが、どのような働き掛けによるものなのかについて有効な情報を得るまでには至らなかった。今後は、授業研究の一つの方法として、教師の働き掛けに焦点を当て、会話の成立状況、言葉掛けの内容を量的に分析したり、目標達成状況を数量で示したりするなど授業実践の充実を図っていきたい。

授業実践と生活場面の実践を関連させる取組は、獲得した力を生活場面で応用することに着目した研究である。つまり、その内容は、障害のある人々の社会参加の実現を目指すものであり、ノーマライゼーションの観点からも価値の高い研究だと考える。わたしたちは、生活場面で子どもがよさやもてる力を発揮する条件を整えるために、「どのような内容を、どのような道具を使って、どのような場で、どの人につなぐことが有効であるのか」を探ってきた。授業実践と生活場面の実践を関連させる取組としては、「共通の教材・教具」、「手掛かりになる言葉の共通化」、「生活場面での活用を視野に入れた教材・教具、支援ツールの開発」、「自立を目指した支援のフェイディング」が有効であるなど、多くの知見を得ることができた。今後は、それらの知見を生かして、学校、家庭、地域生活で自分のよさやもてる力を発揮する子どもを目指した授業づくりの更なる充実を図っていきたい。

引用・参考文献

- 独立行政法人国立特殊教育総合研究所（2004）自閉症教育実践ガイドブック ジアース教育新社
- 独立行政法人国立特殊教育総合研究所（2005）自閉症教育実践ケースブック ジアース教育新社
- 肥後祥治（2002）自閉症への対応 太田俊充・宮崎英憲・中坪晃一（編）障害児指導法一発達に障害のある子への教育的支援を学ぶ pp. 175-189
- 香川大学教育学部附属養護学校（2004）第13回研究紀要 確かな社会参加につなげるためにはⅢ—支援システムの確立：移行・共動をキーワードにして—
- 鹿児島大学教育学部附属養護学校（2000）研究紀要第12集 一人一人の子供の将来の豊かな生活につながる教育課程の編成はどうあればよいのか
- 鹿児島大学教育学部附属養護学校（2001）研究紀要第13集 一人一人の子供の将来の豊かな生活につながる教育課程の編成はどうあればよいのか
- 鹿児島大学教育学部附属養護学校（2002）研究紀要第14集 一人一人の子供の現在及び将来の豊かな生活につながる授業づくり—個別の指導計画の作成と活用を通して—
- 鹿児島大学教育学部附属養護学校（2004）研究紀要第15集 子どもの生活をつなぐ支援体制づくりをめざして
- 鹿児島県総合教育センター（2005）研究紀要第108号 個別の指導計画に基づく授業の在り方に関する研究
- 鳴門教育大学学校教育学部附属養護学校（2004）研究紀要35自閉症の児童生徒のための指導プログラムの開発
- 鳴門教育大学学校教育学部附属養護学校（2006）研究紀要37特殊教育から特別支援教育へ—特別支援学校としての役割
- 新潟大学教育人間科学部附属養護学校（2005）研究紀要第28集 自立につながる力を育てる
- 文部省（2000）盲学校、聾学校及び養護学校指導要領（平成11年3月）解説—各教科、道徳及び特別活動編—
- 文部科学省（2006）特別支援教育を推進するための制度の在り方について（答申）
- 太田正己（2004）特別支援教育のための授業力を高める方法 黎明書房
- 小川 浩（2001）重度障害者の就労支援のためのジョブコーチ入門 エンパワメント研究所
- P. A. アルパート/A. C. トールマン（1992）はじめての応用行動分析 二瓶社
- 徳永亜希雄（2005）独立行政法人 国立特殊教育総合研究所・世界保健機関（WHO）編著 ICF活用の試み 第1章 第2節
- 特別支援教育の在り方に関する調査協力者会議（2003）今後の特別支援教育の在り方について（最終報告）
- 富山大学教育学部附属養護学校（2004）子ども生き活き支援ツール 藤原義博（監修）明治図書
- 富山大学人間発達科学部附属養護学校（2005）教育実践研究会要項・研究紀要第26集 一人一人の教育的ニーズに応じた支援はどうあるべきか
- 富山大学人間発達科学部附属養護学校（2006）教育実践研究会要項・研究紀要第27集 児童生徒が地域社会で主体的に活動するための支援はどうあるべきか
- 筑波大学附属大塚養護学校（2006）研究紀要第50集 個のニーズに応える特別支援教育の深化と充実をめざして（2）
- 山本淳一（1997）応用行動分析学入門 小林重雄（監修）7章 pp. 121-138 学苑社